

不活性な学生の心理メカニズムと活性化方法

～NPO における実践的研究～

1140488 村上 麗

高知工科大学マネジメント学部

1 概要

学生（個人）と NPO（組織）を対象とし、3 年間の NPO 活動から得た学生の活性化モデルの推論に、脳科学・脳神経科学をヒントに得た人の認知と社会心理学・発達心理学・行動心理学といった心理学や、学生の活性に関する事例研究を加え、活性化しない学生の心理構造の仮説を既往の論理および先行研究を踏まえて提唱した。さらに、実地調査として学生活動からモニタリング及びインタビューを行い、得られた調査から活性化しない心理状態プロセスモデルを体系化した。以上を踏まえ、学生が「目的を持つ⇒活動する」方法を考え、それを実行する NPO の運営方法を提案する。

2 背景

地域の活性化に産民官学の連携が必要であると考え、それを軸に 3 年間様々な学生活動を行う中で、1000 人を超える学生との出会いがあった。その中で多くの学生が「思考⇒行動」のプロセスに大きなラグがあることに気付いた。実際に、大学 2 年の春に企画運営したイベントでは、約 100 人の青年が国際分野に触れ、活動意思を示したが、全員が行動するに至らなかった。その中で、「目的を持つ学生」は、積極的に発言を行い、周囲の人とのコミュニケーションをはかっていたが、「目的を持たない学生」は、消極的であり、話し合いにもあまり参加しない姿が伺えた。

そこで、学生が目的を持つことは、学生を活性化させることができるのではないかと考え、研究では、学生が目的を持たない心理構造と活性化しない心理構造を解明し、「目的を持つ⇒活動する」方法を提案する。そして、得られた結果を用いて、NPO の運営方法を提案する。

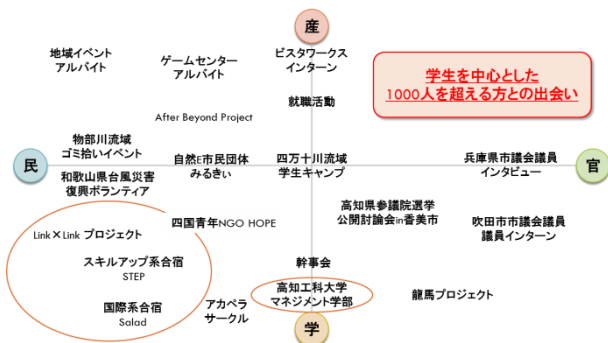


図-1. 予備調査「3年間学生のモニタリングを行った活動の全体像」

目的を持つ学生	笑顔の人が多く積極的に行動主体的な行動イベント前後の変化が大きい現状の満足度が低い	人と積極的に関わる発言量が多い課題に真剣に取り組む自分に足りないものを自覚している	積極的に行動主体的な行動人同士すぐ仲良くなる自己実現の欲求が高い円滑なコミュニケーションが行われる
目的を持たない学生	人とあまり関わらない楽しそうではない発言が少ないイベント前後の変化が小さい現状に満足している周りに流される	退屈さを感じる目的への意識が低い自分の数に籠りがち同じ人と一緒にいる変化を好まない保身の意識が高い	目的を持つ人の影響で目的を抱く理想が低い客観性が強い

図-2. 予備調査「目的行動と目的なし行動の比較」

(作成：村上麗「NPO を中心とした 3 年間の活動 (図-1 参照) における学生に対するモニタリングおよびインタビュー」から比較)

3 目的

- ① 学生の活性化しない心理構造の解明
- ② 「目的を持つ⇒活動する」方法の提案

4 研究方法

研究対象を私自身が関わった NPO (四国青年 NGO HOPE など) と学生に置き、3 年間の活動における学生の観察・インタビューから推論を立て、そこに学生の活性に関する学術研究と事例研究を加え、仮説を作成する。検証は、自らが所属する、四国地域の活性化を目的とする四国青年 NGO HOPE での活動と他の学生活動で、目的を持たない心理構造をモニタリングとインタビューにより調査する。検証先は、①青年のボトムアップを目的とした四国青年国際系合宿 Salad②青年活動家および青年活動団体のモチベーションの維持・向上を目的とした Link×Link プロジェクト③流域の地域資源に触れる四万十川流域学生キャンプの 3 つから分析を行う。得られた調査結果を基に仮説を修正し、学生のが「目的を持つ⇒活動する」方法を提案し、さらに、NPO の運営方法を提案する。

4.1. 定義づけ

下記の言葉は、学生の活性化しない心理構造を解明する上で必要となる前提知識であるため、国語辞典を元に研究に沿ったものとなるよう編集し、定義づけた。

・理想：人が心に描き求め続ける、それ以上望むところのない完全なもの。そうあってほしいと思う最高の状態。また、理想には、実現可能なものと実現不可能なものがある。

・現実：今日の前の事実として現れている事象や状態。

ギャップ：大きな相違。隔たり。ずれ。

- ・認知：ある事柄をはっきりと認めること。
 - ・認識：物事を見分け、本質を理解し、正しく判断すること。
 - ・認知的不協和：人が自身の中で矛盾する認知を同時に抱えた状態。
 - ・欲求：生活体に生理的・心理的な欠乏や不足が生じたとき、それを満たすための行動を起こそうとする緊張状態。動機：生活体に行動を起こさせ、目標に向かわせる心理的な過程。意思：何かをしようとするときに元となる心持。
 - ・行動：外部から客観的に観察できる、人の動きや反応。
- 興味：ある対象を価値あるものとして、主観的に選択しようとする心的傾向。
- ・感情：物事に感じて起こる心の働き。
 - ・経験：実際に見たり、聞いたり、行ったりすること。また、それによって得られた知識や技能など。
 - ・知識：ある事柄などについて、知っている内容。
 - ・信念：正しいと信じる自分の考え。
 - ・環境：周りを取り巻く周囲の状態や世界。人間あるいは生物を取り囲み、相互に関係し合って、直接・間接に影響を与える外界。
 - ・属性：共通して備わっているとされる性質や特徴。
 - ・態度：ある特定の対象または状況に対する行動の準備状態。また、ある対象に対する感情的傾向。
 - ・価値観：物事を評価する際に基準とする、何にどのような価値を認めるかという判断。
 - ・気づき：それまで気にとめていなかったところに注意が向いて、物事存在や状態を知ること。
 - ・考える力：事象を論理的に、かつ、構造的に分析する力。
 - ・学生：18才以上30才未満の大学生。
 - ・活動：生き生きとして、元気で勢よく動くこと。
 - ・活動家：積極的に活動する人。

4.2.推論

多様な人と関わる環境は、多様な価値観を生み、自分以外の視点の存在に気づくことで、多様な視点と広い視野を以て事物にアプローチできるようになる。また、多様な経験は人格を形成し、実感として得られた経験は、ものの見方を増やす。さらに、一般教養や専門知識は、学生の考える力を向上させる。広い視野、多様な視点、多様な経験などから得られた人格、一般教養や専門知識を創出することは、事物に対して色々な見方ができるようになる。見方が増えると、気づきが増えるので、理想と現実のギャップを認知し、目的を持てるようになるのではないかと考えられる。また、色々な見方、一般教養、専門知識から考える力を向上させることは、学生の認識する力を育てることができる。ある事象に対して「気づき：認知」と「考える：認識」の両のアプローチによって、さらに、理想と現実のギャップを捉えられるのではないかと考える。つまり、多様な

人と関わる環境や多様な経験、知識、属性が薄い学生は、「認知⇒認識」力が弱いために、理想と現実のギャップを捉えきれないので、活性化しないのではないかと推測する。

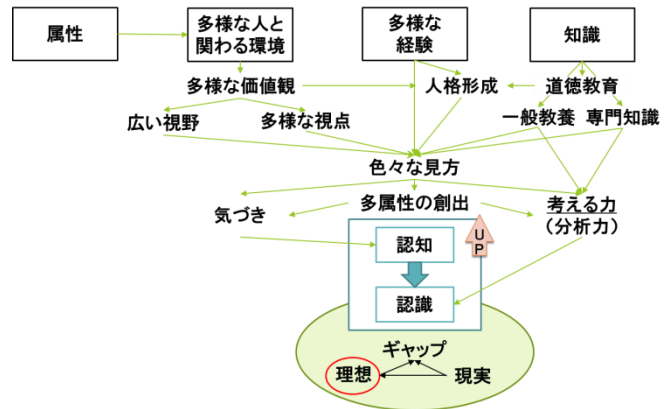


図-3.推論「学生が『目的を持つ⇒活動する』心理メカニズム」

(作成：村上 麗「3年間の活動」から不活性な学生の心理構造を推論)

4.3.学生の活性化に関する学術研究

「発達心理学（脳神経心理学の観点より）」

目標の理解は2才頃を境に理解できるようになり、また、試行錯誤的だが、誤りを修正する自己修正の自我も芽生えてくる。さらに、全体を見通したプランニングは、多くは4才前後からできるようになるが、3才児でも初歩的なプランニングはできるようになる。ただ、最初の注目すべき変化は4歳から5歳頃であり、この頃になると内言を用いて思考を意識的に制御できるようになる。7歳から9歳ごろは時間と空間の系列化ができるようになる。10歳ごろには、2回目の大きな変化を迎え、初歩的な論理的思考に基づいてプランを形成できるようになり、考えてから行動するようになる。3回目の変化は12歳ごろであり、思考の制御に置いて抽象的、分析的、系統的なアプローチができるようになる。『脳と教育』P39-41参考)。しかし、日常生活におけるさまざまな運動の内、そのすべてが意志による意識的なコントロールによってなされているわけではない。ゆえに、脳科学、脳神経心理学では、人の一次的欲求である生理的欲求まではわかるが、二次的欲求である社会的欲求までは説明することは、現段階の研究では限界がある。

「行動心理学（社会心理学の観点より）」

・消費者意思決定過程モデル

人が意思決定し、行動に至る過程には周囲から受ける外的刺激やこれまで行ってきた経験、また自らが持つ属性から派生された感情が関係している。(図-4参照)ここで主に意思決定において取り上げられている要素は「満足」だが、それは経験などの行動の結果によって生み出されるものである。そのため、行動を創出する心理について描かれた学術が必要となる。

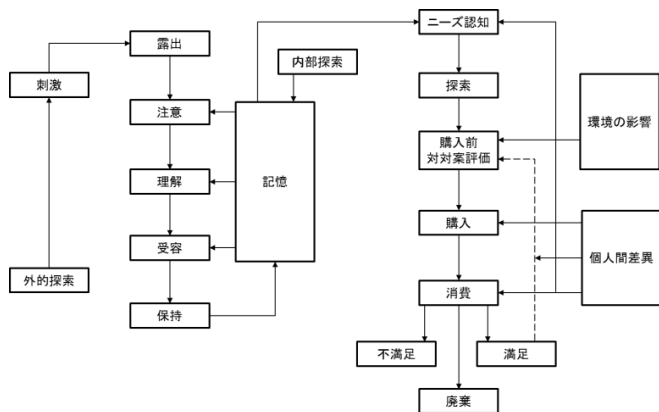


図4-1.意思決定行動モデル

(出典：『消費者行動論体系』P12)

・認知的不協和理論

フェスティンガーのこの理論によれば、2つの認知が矛盾している場合、心理的な不快を感じ、この不協和を低減あるいは解消するために行動すると言われている。(図-5 参照) これは、矛盾する2つの事象に対して「不協和を提言・解消したい!」という欲求が関係していると考えられる。ゆえに、行動を発現する「動機」と不協和を解消したいという「欲求」、また、行動の前段階である「態度」についての学術が必要となる。(『消費者行動論体系 p94-p95 参照』)

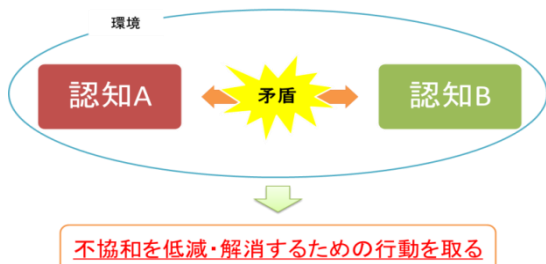


図-5.認知的不協和理論

(出典：『消費者行動論体系』 p94-p95 を参考に図式化。)

・欲求

欲求は人間の欲望や欲求について、哲学や社会学で考察されているところから従えば、次の3通りの考え方があり、①欠如としての欲求②媒介としての欲求③根源としての欲求 (消費者行動論体系 p15-17 参照)

・態度

態度は、個人が目標を達成するために存在すると考えられる。このとき、動機を達成するある機能を果たすために態度が形成される。つまり態度とは、「個人の基本的動機を反映したもの」と考えることができる。また、態度は感情・認知・行動の3つの要素からできるとされ、これらの要素が順に形成されることによって態度が形成されると考え方もある。(『消費者行動論体系 p102-103 参照』) 態度の機能には、①功利的機能②価値表現機能③自我防衛機能

④知識機能があるとされている。(『消費者行動論体系 p100-p102 参照』)

・動機

動機は目標と動因がなければ発生しないとされ、また、①生理的動機②内発的動機③外発的動機の3つに分けられることもある。

動機はどのような過程を経て機能するかは次のような定説がある。まず、(1) 外部から入ってきた刺激が動因や覚醒をもたらす。この場合覚醒は自動的・生理的(例：急に何かに出会いびっくりする)、感情的(例：ドラマを見て悲しい)、認知的(例：難しい問題にぶつかって考え込む)なものどれかである。(2) 次の段階は目的行動を取ろうとする、あるいは(3) すぐ行動する、のどちらかである。さらに、(4) 活動の結果、新しい経験をする、また満足を感じるという結果を生じる。この、(4)の結果が(1)にフィードバックされて刺激に対する反応の変化として現れることになる。(『消費者行動論体系 p22-27 参照』)

また、人は目標を達成しようとする動機が強い場合、努力を注入する。努力とは「目標を達成賞として費やす時間やエネルギー」のことである。動機づけられた人は、興味や興奮や情熱を感じる。こうした感情は、動機の結果として感じられる。(『消費者行動論体系 p21 参照』)

他に、学生が目的を達成する概念に「希望」がある。希望は「目標に合った結果が可能と評価されるとき喚起される正の感情」と定義される。希望はうれしい、興奮するというような正の感情であり、目標と合致した自分にとって望ましい結果が予測されると感じられるものである。さらに、希望は3つに分けることができる。

① 希望する (to hope)

目標通りの結果が可能だと強く望むことを意味する。(例：ダイエットをして望みどおりの体重が可能であると強く望む状態。)

② 希望を抱く (to have hope)

目標に合った結果が可能だという正の感情を楽しむことである。(例：ダイエットをしようと思い、その目的でハーブ茶を購入して感じる楽しみにしている状態。)

③ 願いをかける (to be beautiful)

目的に合致した結果が実現可能だという期待を持つこと。これは単に期待するというのではなく、結果が仮に悪くなくとも「願いをかける」と結果への期待値を上げることができる。(例：何回もリバウンドした経験があっても、痩せることを神社でお願いする状態。)

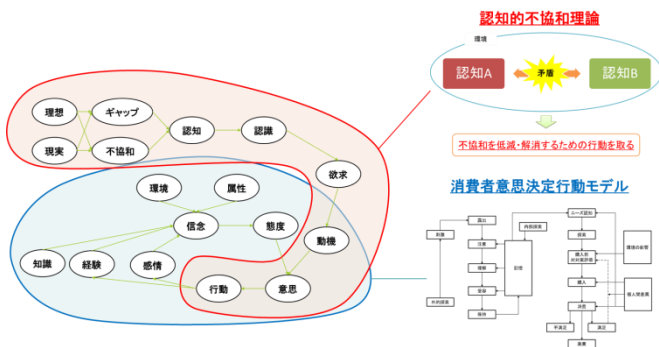
希望を持つことは、行動の推論を動機付けることになり、認知の動きを促進するとされている。しかし、希望がどのように行動に影響するかは未知数の部分が多い。(『消費者行動論体系』 p21-p22)

『行動心理モデルの形成』

主としては、フェスティンガーの認知的不協和理論を用いて、2つの認知に対するギャップ・不協和から行動していくものと、消費者意思決定行動モデルを下に、行動心理モデルを形成している。

《説明》

抱いた理想と周囲の環境から生まれる現実のギャップ・不協和を認知・認識すると、そのギャップを解消したいという欲求・動機が生まれ、行動に至る。行動は感情を生み、自身の経験ともなり、さらに知識・環境・属性が加わることで、信念を形成する。信念は後に行動をする前段階である態度を形成し、意思を持って行動するようになる。そして行動は、また感情や経験を生んでいくというように、循環する。



図ー6.学生の行動心理モデル

(作成：村上麗『認知的不協和理論』『消費者意思決定行動モデル』からモデルを形成)

ただ、このモデルには①「認識⇒認知」がうまく機能しなければ欲求が創出されないこと。②目的達成の欲求が生まれても、動機づけがされなければ、行動の循環が止まってしまうこと③理想と現実の認知がどのように行われるか、がまだ明確に示されていない。

以上3点を踏まえて、事例研究を行った。

4.4.学生の活性に関する事例研究

「産業連携のNPO活動における学生教育～ウェアラブルコンピューターの普及に向けての取り組み～」

《要約》

NPO 法人ウェアラブルコンピューター研究開発機構の活動（オートバイ耐久レースやファッションショー、音楽ライブなどのウェアラブル普及啓発・システム開発）の中で、学生の役割について、学生教育という観点から述べる。

《事例研究の検証》

本研究によって、活動の創出には知識と経験が起因していることがわかった。また、たとえその活動自体に興味がなかったとしても、経験により、活動自体に興味を創出し、自主性を持って行動することがわかった。

しかし、ここでは学生の「興味」が経験からくる活動によって創出されることが示されていたが、その詳細については記述されてい

なかった。よって、学生の「興味」に関して取り上げた事例研究を分析する。

「学部学生の興味関心から見た対人社会心理学研究の変遷～卒業研究のテーマ分析～」

《要約》

「対人関係、対人行動の社会心理学的研究」ゼミの卒業論文のテーマを分類し、学部学生の研究関心の観点から、過去30数年にわたって提出された481編に及ぶ卒業論文を分析することで、対人社会心理学研究の変遷を跡付ける。

《事例研究の検証》

本研究によって、学生の興味が活動からだけではなく、所属大学などの身の回りの「環境」や自分自身の「属性」からくることがわかり、それが学生自身の興味を刺激していた。

しかし、「興味」が「自主性」を促すことはあっても、それがはたして「行動」に至るかは疑問が残った。よって、次の事例では、学生の自主性に焦点を当てつつ、行動に重きを置いて分析を試みる。

「大学・学生・NPO・行政の連携によるまちづくり支援～地区計画策定支援を中心に～」

《要約》

NPO：専門的知識と技術の提供・活動フレームの策定・進行管理、学生：活動イベントせいかの整理とまとめ・成果物作成を一部分担、行政：運営のサポートを役割に、さいたま市の都市計画策定支援を行い、学生は市民向けの地区計画策定プロセスの紹介資料を作成した。

《事例研究の検証》

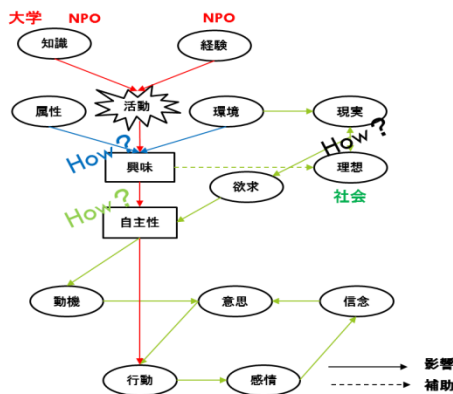
周囲の環境である現実と興味が一因となって生まれる理想とのギャップを認識すると、そのギャップを埋めたいという欲求が生まれることで自主性が創出されることがわかった。また、このギャップから生まれる欲求は、動機を形成し、動機は意思となって、行動を生む。さらに、行動は感情を生み、自分にとって「正しい」という信念を形成し、その信念は、その人自身の意思を作り、また行動するという循環を生む。この行動の循環は学術研究において実証されていたことの確認になった。

しかし、ここにおいても理想と現実のギャップの「認知⇒認識」については詳しく述べられておらず、また、学術研究でも立証されていなかった。

『行動心理モデルの形成』

3つの事例を分析し、学生の行動を体系化してみたが、理想の創出過程や、理想と現実のギャップに対する認知・認識に関する先行研究はなされておらず、どのようにすれば目的を持つようになるのかはまだ解明されていなかった。よって、不活性な学生の心理構造をモデル化し、目的を持っていない心理状態を明らかにすることで、学

生が目的を持てる方法を実地調査から検証する。



図一7.学生の活性に関する事例研究の未解決課題の抽出
(作成：村上麗「上記の3つの事例の分析」から作成)

4.5.仮説

3年間の学生活動で出会った1000人以上の学生のモニタリングとインタビューに、脳神経心理学から得た発達心理学、認知心理学と社会心理学から得た態度、認知、欲求、動機についての学術研究と、消費者意思決定行動モデルと認知的不協和理論を軸に作成した行動心理モデルを加え、さらにそこに学生の活性化に関する事例研究を付け足し、仮説(図-8)を作成した。

まず、このモデルにおいて重要なことは「理想」と「現実」の存在である。理想は2種類あると考えており、一つ目は、「実現可能なもの」である。これは、主に具体性を持って計画立てる目標などが例に挙げられる。二つ目は、「実現不可能なもの」である。これは、主に夢や希望などが例に挙げられる。しかし、先にあげたものはあくまで例であり、その人自身の価値基準によって差異がある。つまり、自らの判断によって「実現可能であるか」が変わることである。では、その理想はどのように形成されるかだが、私の仮説では、理想は周囲の環境から形成される現実に依存しており、そこに、さらにその人が抱く「興味」が補足要因となり、形成されるのではないかと考えている。しかし、理想と現実のギャップをただ感じるだけでは学生を活性化させるための行動を促すことは難しい。

性別などの本来的にその人自身に備わっている属性は心に影響しており、多様な人と関わる環境に置かれ、他の価値観に触れることで、多様な価値観を生むようになる。ある対象にアプローチをかけるとき、これまで成長してきた過程で得た価値観から対象を見ることになるが、他の人の価値観の存在に気付くことで、多様な視点を生み、さらに、視野が広がり、いろいろな見方ができるようになることで、気付きを生み、理想と現実のギャップ・不況和から生まれる欲求を認知する力が増し、行動を促せるのではないかと考える。また、成長過程で得られる一般教養や専門知識、道徳教育などの知識や行動することによって生まれる多様な経験は人格が形成する

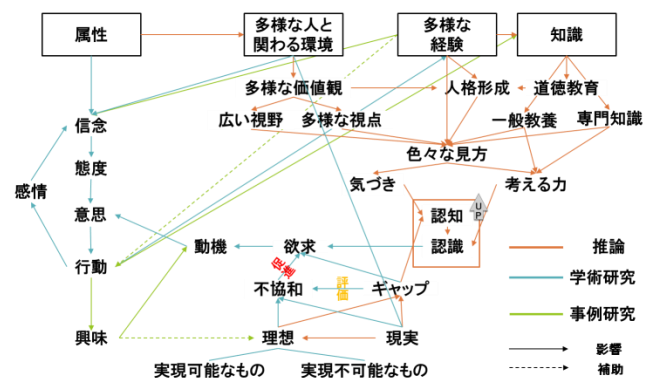
ため、いろいろな見方・考え方ができるようになり、考える力が増すことで、認知する力を高めることも重要である。

認知・認識力を高めることは、理想と現実のギャップから生まれた欲求を認知した上で、自らの意識として理解する認識できるため、浮つくことのない軸のある動機づけがなされ、行動の発現と維持がなされるため、行動を繰り返し、生き生きと目的を持って行動する「活動」へ促す循環ができるのではないかと仮説立てている。

しかし、3年間の活動を通して不協和を認知認識するとその不快感を解消・低減するために行動を誘発できることはあるが、ギャップを認知認識してもその存在を認めるだけで、必ず行動するに至るとは言えなかった。よって、この仮説では、ギャップを他者から客観的に『評価』することで、行動を誘発していく不協和を生み出すようにモデルを編集している。

行動を形成する循環システム「行動→感情+属性+環境→信念→意思+動機+多様な経験→行動」は、事例研究と学術研究を元に作成しており、さらに、行動は興味を生み、その興味が理想の形成の補足要因となっているのではないかと考え、まず、「行動」が学生の「活性化」を生んでいくという仮説を組み立てている。

よって、学生が持つ「属性」「多様な人と関わる環境」「多様な経験」「知識」に何かしらの不祥事が生じたことによって、認知認識力が弱まり、目的を持たず、不活性になるのではないかと考えられる。この仮説を持って、①目的を持たない心理構造の解明②「目的を持つ⇒活性化する」方法の提案を行っていく。



図一8.仮説：不活性な学生の心理構造

(作成：村上麗「学術研究」「事例研究」「推論」を下に提唱。)

5 結果

5.1.実地調査

人の動機は、「行動の発現」と「行動の維持」の性質を持つ。では、その「動機そのもの」はどこからくるのか。最も近い形で現れるのは「欲求」。あれがしたい、これがやりたい、こうなりたい、それがほしい・・・などなど。一説には、「欲求」は、①欠如としての欲求②媒介としての欲求③媒介としての欲求の3タイプがあ

ると言われている。その欲求が、「生理的動機」や「内的動機（自分のため）」、「外的動機（人のため）」を生んでいく。上記に書いてあるように、「動機」の性質には、行動の発現と行動の維持がある。行動は、感情を生み出し、感情は信念を生み出す。ここで生み出された信念に「経験」や「知識」、周囲の「環境」、その人自身の「属性」が加わることで、さらに強い「信念」を生む。人が抱く「信念」は、その人自身の「態度」を形成し、「態度」は「意思」となって行動に表れる。そして、また「行動⇒感情⇒信念⇒態度⇒意思⇒行動・・・」と繰り返されていく。つまり、動機づけが甘い場合、一時は行動できて、行動の維持をすることができず、結局、「やっただけ」に終わってしまう。それでは、どうすればうまく動機づけに至る「欲求」を生み出すことができるのか。大学3年間の活動と学術研究、事例研究を用いて、その要素は「目的の有無」ではないかと考えた。目的を持って行動する学生は、活動に意味や意義を見出して活動していく。自分がなんのためにやっているか自覚がある学生と、なんのためにやっているのかわからず行動する学生とでは、行動の一貫性に差が生まれる。

「四国青年国際系合宿 Salad（以下、『サラダ』とする。）」

《活動内容》

「国際」という分野を用いて、青年活動の活性化のために、多くの青年に活動の一步を踏み出すきっかけを提供することで、青年活動家の増加、また活動の安定化に取り組む。

《実地調査の分析》

サラダにおいてあまり積極的に議論に参加してこない学生がいたため、「なぜこの合宿に参加したのか？」と質問すると、「友達に誘われたから」や「なんとなくおもしろそうだったから」という返答が返ってきた。これらの学生には、確かに関わるきっかけはあったが、決して目指す理想の状態があったわけではなかった。そのため、理想と現実とのギャップに差が生まれず、行動したいという欲求が生じなかったのではないかと考えられる。

また、別の事例として、サラダに参加したとしても、行動の維持をできない人もいた。これは、サラダで行われる2泊3日の合宿が自分にとって非現実的空間すぎることが作用している。理想は現実には依存しており、その人の現実に沿った状態で理想を創出しない限り、理想の創出になり得ない。そのため、理想と現実のギャップがあいまいなものとなり、一時の行動は創出できたとしても、その人自身に動機づけとして落とし込まれることがなく、行動に至ることができないと考えられる。しかし、逆に、スタッフの人から「スタッフやらない？」などと声をかけられた場合、その人にとっての現実に近い形で理想が描かれるため、活動創出に至る可能性が高い。

「Link×Linkプロジェクト（以下、『LLP』とする。）」

《活動内容》

人的ネットワークの形成につながる「場」を提供することで、青年活動家のモチベーションアップ・維持を行い、さらなる活動の場を作り出していくことを目的に開催。

《実地調査の分析》

LLPには、目的の重要性と必要性を心得た上で関わる学生が多い。しかし、その必要性を感じながらも、参加行動に至らない場合もある。そこで重要になるのが、「評価」である。一つは、「費用対効果」がある。そこで得られると思われるその人自身にとっての利益と、それに行くことでかかるお金や時間などの費用を踏まえ、費用の割合の方が大きいと当然行動には移らない。また、「経験的観測」も評価の一つにあり、「周囲の人から受ける評価」もその人にとっての判断軸になるようである。さらに、物理的距離などの「実現可能性」を考え、自分にとってその自称が不可能であると判断した場合も、人は行動しなくなる。これらは、その人にとっての理想の状態があるがために、行動しなくなる例である。

「四万十川流域学生キャンプ（以下、『学生キャンプ』とする。）」

《活動内容》

流域の多様な地域資源に、新たな外部視点(学生)を取り入れ、学生・流域住民・行政等、事業に関わる関係者において一定の実施効果を導くようプロセスを設計するキャンプを計画・実施。

《実地調査の分析》

この合宿では「目的の発生」を間近で体験した。始めは参加した学生の多くは積極性が薄く、あまり自主的に関わってくるようなことは見受けられなかった。しかし、「景観」という共通の興味を参加者全員が所持しており、共感を生んでいったことで、本来であればただの「理想」であったものが、一人ひとりにとっての「現実」となっていったように見受けられた。つまり、人に受け入れられることは、その人自身の居場所の形成となり、現実的空間になるのではないかと考えられる。

5.2. 調査結果の分析

5.2.1. 目的行動と目的なし行動の比較

目的を持つ学生では、議論や人とのコミュニケーションを積極的に行う学生が多く、議論においても主体的に関わる人が多かった。また、自らが描く理想の状態と現状の自分に対するギャップを認識しており、例えば、2泊3日の合宿であるサラダでは、活動意識が変わる学生がいることも見てとれた。

逆に、目的なく行動する学生は、人とあまり関わらず、自分の知っている範囲の人とのみ行動する姿が見受けられた。しかし、これは議論やイベントに入り込まず、客観的に行われる事象を見ている人も見受けられた。

5.2.2.目的を持たない心理状態モデル

学生が目的を持てなくなる道筋にはいくらか共通項があることがわかった。一つ目は、「対象へ必死に行動をしかけること」で理想と現実の乖離を実感してしまい、そのことに不条理を創出し、逃避行動を取るケース。また、周囲の環境や無知であること、経験が薄いこと、所属する所もなさまようなど属性が薄いと、行動欲求が生まれず、信念が形成されないケース。この2のケースは、理想や現実に対する無関心さを創出する。理想や現実に関心であるとそのギャップを感じないため行動に移らず、理想がわからないので目的を持つことができなくなる。また、理想と現実の不協和を感じないと現状をよくしたいという欲求も生まれず、ただ、なんとなく行動する学生は、理想と現実の違和感も認識することができないので、目的を持たなくなる。

また、現実に対する満足度が高いというケースもある。現実に対する満足度が高いと、行動したとしても現実に満足しているため、理想を描く必要性がなく、さらに、今ある状態を維持しようとする行動を取る。目的を持つ必要性がないので、まず、目的自体に興味がないため、「目的がどのような効能を持っているか」や「目的を持つ意味」がわからないので目的を持たなくなると考えられる。

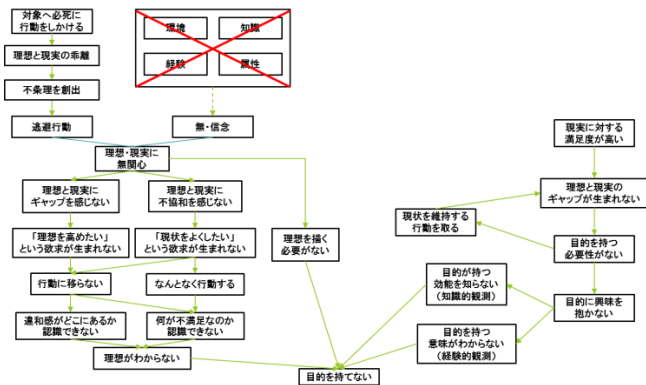


図9.目的を持たない心理状態モデル

(作成：村上麗「モニタリング及びインタビューによる実地調査」からモデルを形成。)

5.2.3.活性化しない心理プロセスモデル

ここでは「目的はあるが活性化に至らない」こととして、たとえ目的があったとしても、行動に移るのに、お金や時間や労力といった費用が大きければ、行動の必要性を感じないので、活性化されなくなると考えられる。また、理想が低いと、理想と現実のギャップが小さいため、行動したとしても理想と現実のギャップが小さいため、活動意欲も低く、行動の創出はできたとしても、一時だけで収束してしまう。

また、目的を持たないと理想と現実のギャップが生まれないので、行動欲求も生まれず、活動動機が創出されないので活性化されない。

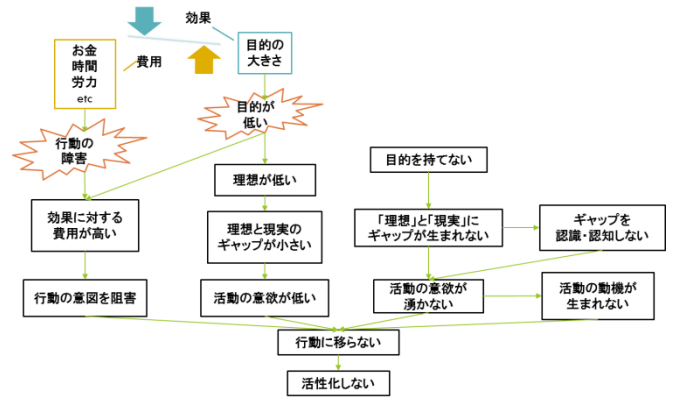


図10.活性化しない心理プロセスモデル

(作成：村上麗「モニタリング及びインタビューによる実地調査」からモデルを形成。)

5.3.モデルの修正

《理想の構成》

理想は周囲の環境である現実を軸に、その人が持つ属性や多様な経験、知識に加え、行動によって生まれる興味が補足的に加わることで、構成されていることが、実地調査を進めていく中で考えられた。例えば、国際系合宿 Salad において、将来のプランニングをする機会があったが、周囲の見解(特に先輩)の意見を聞くことで、明確になる姿が見受けられた。「先輩」は自分の一歩先を歩く人ため、その学生自身にとって実現可能な理想となったことや、与えられた知識、考え方などによって見解が深まったため、理想が構成されたのではないかと考えられる。しかし、補足的に生まれたものであるため、しっかりとした検証を行うことができず、今後の課題となった。

《多様な人と関わる環境が多様な経験を生む》

多様な人と関わる環境は、その人にとって多種多様な人との「出会い」という経験になるので、多様な経験を生むようになる。また、それらの人から得られた知識や考え方、ものの見方は「知」となり、学生にとっての「知識」として蓄えられる。

《多様な経験は多様な価値観を創出する》

多様な経験は、そのことに対する見解が増えることや、人格形成に関わるため、学生の多様な価値観の創出に関わる。地域活性化に関する活動のみしかやって来なかった学生はその価値観だけでしか物事を判断できないが、そこに「国際」や「教育」、「環境」などの視点が加わることで、新たな価値観が創出されるようになる。

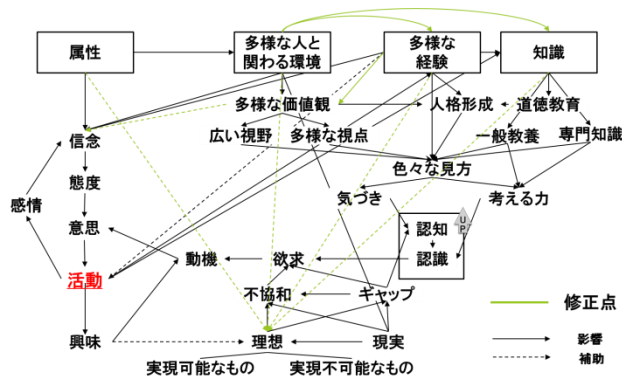


図-11.不活性な学生の心理構造

(作成: 村上麗「仮説」に「調査結果」を組み合わせ仮説を修正)

6 対策と提案

《NPOの運営方法の提案》

学生が「目的を持つ⇒活性化する」方法を下に、NPOの運営方法を提案する。しかし、これは「次の世代を担う人材の創出」を問題に抱えている組織であることが前提である。ただ、多くの社会にある諸問題を解決は時間がかかるものが多いため、人の幸せを目指す組織のほとんどにおいて、有効的であると考えられる。

I. 学生の現状を認識する

理想は現実依存しているため、学生に目的を持たせるためには、今、どのような現状に置かれているか把握する必要がある。そこ抜きに与えた理想は学生にとって実現不可能な理想となるため、ギャップをうまく創出することができず、動機づけがなされないため、行動に至らない可能性が出てくる。また、活動の中で、悩みや不安を聞くだけでも、自らが置かれている現状を学生自身が整理・把握し、行動に移るようになることもあった。

II. 予測可能な理想を与える場を創出する

予測可能な理想は抱かせたとしても、それを実際に行動に移すには、なるべくその理想を明確にする必要がある。しかし、現実はあるゆる想定外のことが起こりうる可能性があるため、あらかじめ活動の場を創出し、そこで経験させることによって、さらに理想を刺激し、ギャップを感じさせ、さらなる行動を誘発させることで、活性化させることができる。

III. 認知・認識力を高める人材育成システムを形成する

理想や現実のギャップを創出したとしても、それを学生自身が認知・認識できなければ、行動の欲求は生まれない。そこで、あらかじめ認知・認識を高めるシステムを持っておくことで、自ら目的を持ち、現実とのギャップによって行動していく状態へ持っていく。

7 今後の課題

《学生の活性化事例の調査》

実地調査におけるモニタリングとインタビューにおいて、仮説の構成が正しいことがある程度証明された。しかし、実際に活性化された事例がまだ繁栄されていない。今後、インタビューを中心に実際に活性化された事例を検証することで、モデルの確実性と信頼性を向上させる必要がある。

《理想の形成》

「現実を前提に、属性・環境・知識・知識・興味が補助要因となり、学生の理想を形成しているのではないか」ということは、本研究や3年間学生団体に所属する中で予測することはできるが、具体的にどのようなことが要因となり、理想が形成されるプロセスを経ていくのかはまだ解明できていない。

《興味関心》

学生が抱く興味関心は理想を形成し、現実とのギャップを解消したいという欲求・動機を生み、行動に至るようになって考えられるが、「興味はあるけど知りたいとは思わない。」や、「関心だけは持っている。」など、思うことはあっても行動に至らないことはある。本研究においては、理想を形成し、現実とのギャップを生むことで、活動の創出を目指したが、単純に興味を創出することからア

プローチをかけられることもあるのではないかと考えられた。どのようにして興味を抱いているかをモニタリング・アンケート調査することと、どのようにすると興味を抱くようになるかを実験的に行うことで検証していく必要がある。

参考文献

- [1] 消費者行動論体系 (著者: 田中 洋)
- [2] よくわかる社会心理学 (編著: 山田 一誠, 北村 英哉, 結城 雅樹)
- [3] 脳神経心理学 (編集: 利島 保)
- [4] 脳と教育 (編集者: 坂野 登)
- [5] 絶望の国の幸福な若者たち (著者: 古市 憲寿)
- [6] 産業連携のNPO活動における学生教育～ウェアラブルコンピューターの普及に向けての取り組み～ (著者: 塚本 昌彦)
- [7] 学部学生の興味関心から見た対人社会心理学研究の変遷～卒業研究のテーマ分析～ (著者: 高木 修, 田中 優, 子城 英子, 太田 仁, 安部 晋吾, 生田 好美)
- [8] 大学・学生・NPO・行政の連携によるまちづくり支援～地区計画策定支援を中心に～ (著者: 桑田 仁)

謝辞

本研究を進めるにあたり、卒論指導を頂いた那須清吾先生を含め、実地調査において協力いただいた四万十川流域学生キャンプの企画提案者である株式会社濱田事務所代表の濱田竜也さん、また、四国青年NGO HOPEの関係者一同様に深く感謝いたします。